かざり甘茶を煎し童男女にほどこしあたふこれ如來の誕生のときの産湯の甘かりしをかふむりてかくのごとしと俗に三味せん艸といふを此甘茶にいたし行燈に釣をけバ蟲來らずと云

八日華　四月八日つゝじの花を棹のかしらにゆひ付て高く上て佛へ供するといふむかし釋迦如來誕生のときもろ〳〵の天尊天女下り妙なる花をふらし給ふ餘風といふ其ゆらい始り詳ならず

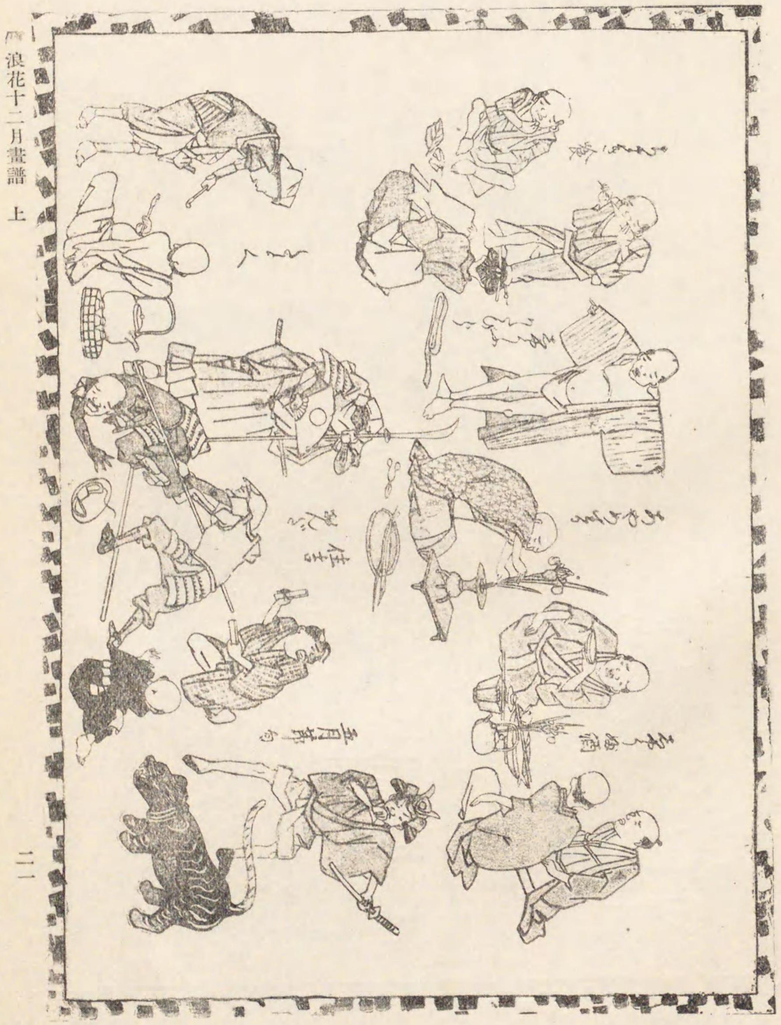
山開　四月八日大峯山信者の　輩　今日山をひらかるゝといふて都鄙諸講中群參す

初鰹　江戸にて例夏四月朔日初鰹とて生の鰹を大金を惜まず賞味する事いと古きことにや　つれ〳〵艸に鎌倉の海にかつをといふ魚ハ彼さかひハさらなきものにて此頃もてなすものなりそれも鎌倉の老人の申侍りしハ此魚をのれら若かりし時迄ハはかゞ〳〵敷人のまへへ出る事はべらざりき頭ハ下部も喰ハず切て捨はべりしもの也と申きかやうの物も世の末になれば上さままても入たつわさにこそはへれど云々文段抄にいふ前段に鯉きじ松たけならでハ鴈をさへ上つかたハ見習ハずさまあしきと侍るに其外の物をも用ふることを述て上代の風に今の世のをとろへたることを歎きいへるなりと云々今ハ專ら江戸にて初鰹を賞翫するなり漉佛會の狂哥に　春の屋生れながらまつた太子とゆびさしてあれほとゝぎすそれ初かつほ天上天下と云づして述られし狂哥也味ふべし○

五月節句　光仁帝天應元年蒙古の賊日本へ攻來る早良親王をして是を伐しめ給ふ親王藤の森舍人親王の靈に祈りて出陣ありし時に五月五日神風吹て賊船くつかへり戰かわづして勝利を給ふ得ゆへに五月五日兜木偶武器を錺りて祝

菖蒲酒　五日に菖蒲酒を飲バ瘟を辟るといふ是に黄雄をすこし加へて一切の惡氣を除くといふ

粽　五



日粽を製すると唐の代に粽を製し初むといふ又日本ハ伊勢物語にも見へたれバ本朝にも古き事と見ゆ常米と餅米と等分に石うすにて挽たるハ悪し臼にて搗き末にあたるをよしとすと歳時記に見へたり端午の祝食として知己の家〳〵に遣す

入梅　五月の節よりのちの壬の日に當るを入梅雨とし五月中の節より後の庚の日に當るを出梅雨とす是又天地の氣候なくんばあらざるの順候なり攝州兵庫の北丹生の山田に栗花落理左衛門といふ者の庭に入梅の井道入梅にふれば必らず水涌上るといふ

住吉御田　毎年五月廿八日住吉から所の東の坊舍の庭にをいて御所車を出し軍勢となぞらへいろ〳〵の花をかざり東西にわかち甲冑を着したがひに合戰のまねびあり扨田植ハ右鎧を着たる坊官長刀をもたせて乳守の遊女にいしやうを着せ笠ふかくかぶらせ池の淵を東より南へ南より西へ西より北へまわるこれを遊女田をうゑるといふ

競馬　五月五日生玉幷に博勞町仁德天皇社より狩獵束姿のもの馬上にて弓矢をもち祭禮あるをヤブサメといふ由來長きゆへ畧す競馬ハ山城加茂の社祭式なれバ是に言ず

住吉踊　攝州住吉社地の誕生石のゆらいよりをこれり右大將賴朝公の妾佐の局といふ女懷妊の所奥方政子の方の嫉によつて京攝へさまよひ來りすでに當社地にて平產しなんぎにおよびしゆへ或農家に入てたのみけれバ農父たのもしく受がひてたうりうさせける内無事成長のため日毎に神前へ參けいする折ふし笠に紅の絹をはつて日にあたらざりしと養育していろ〳〵うたを謳ふて御子をすかし社へ參詣す其拍子のをもしろきとて世にもてはやせり今の住よしをどりニ千歳樂萬歳樂とはやすも此時よりの所傳といふ斯る正しき始めなるに今世願人坊の所業

となり下りたるぞ口をしき

螢がり

腐艸變じて螢と化すあれど川柳の枝のまたに白き泡のごときものたまり其中に生ずるを見る螢ハ城州宇治近江の石山を名物とすれど大坂にてハ玉造桑津の堤よしといふ螢がりといふ題にて狂哥　まぬけ庵ちわんほの友かさそいし螢がりつまがばつめのさきに火ともす○六月

住吉泥湯

六月十四日堺州住吉浦におゐて汐をのれと涌上るを諸病を除くの呪とて人くんじゆして此汐を浴る事をぴたゝし一説に住よしの神輿をそゝぎしあとかくのごとしといふ

ねりもの

遊廓の妓婦をもひ〳〵に衣裳を着かざり姿をやつしていづるをはれとする京大阪のくるわの太夫轉進今ハなしといへども大阪島之内北のふん地京の祇園町ぎをん新地の絃婦けふをはれと美しくけわふて出るをねり物とてくんじゆにおよぶ

にわか

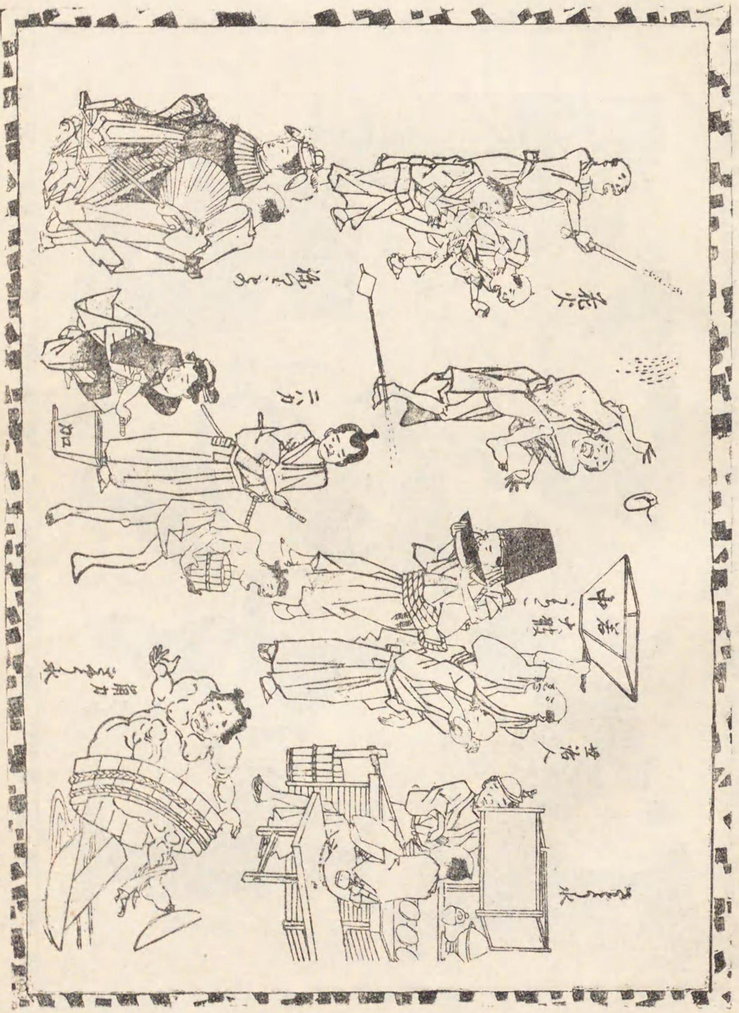
にわかに思ひ付て戯ふれ俳優其ほかさま〳〵のをどけをなすをにわかといふ神事の店先にてこれを行ふ近年京大坂にて大に流行におよぶ江戸でハ立茶ばんといふ

土用餅土用うなぎ

土用ハ四季にあり土の氣始めて事を主るの日なり凡一年の内五行の氣互に循環して以て四時をわかちて以て歳序をなすなり春ハ木氣戊を主り夏ハ火氣戊を主り秋ハ金氣戊を主り冬ハ水氣戊を主るをの〳〵七十二日餘りを主るなり唯土ハ中央に在て四季にふたがふて十八日餘を主るなり其始に戊を主る日を土用といふ夏の土用ハ火氣を主るゆへに別してたへがたくあつし人これをよくちつて春秋冬に其所縁を辨へず

白雨雷

夏日炎暑に犯され地氣のほる事火急にして雨をふらすをゆふだちといふゆへに白雨のふるふらぬをちる事あたハず是天變の一なり雨ハかならずその早朝草木を見るにふらぬ日ハ露ありふる日ハ



露なし白雨にハ其事辨へ知りかたし地氣のほる事天につもり開き發して聲を出すを雷といふ天氣下り地中にかたまり發しうこくを地震といふ雷聲ハ水中へ燃立たる鐵火を入るが如しといふ

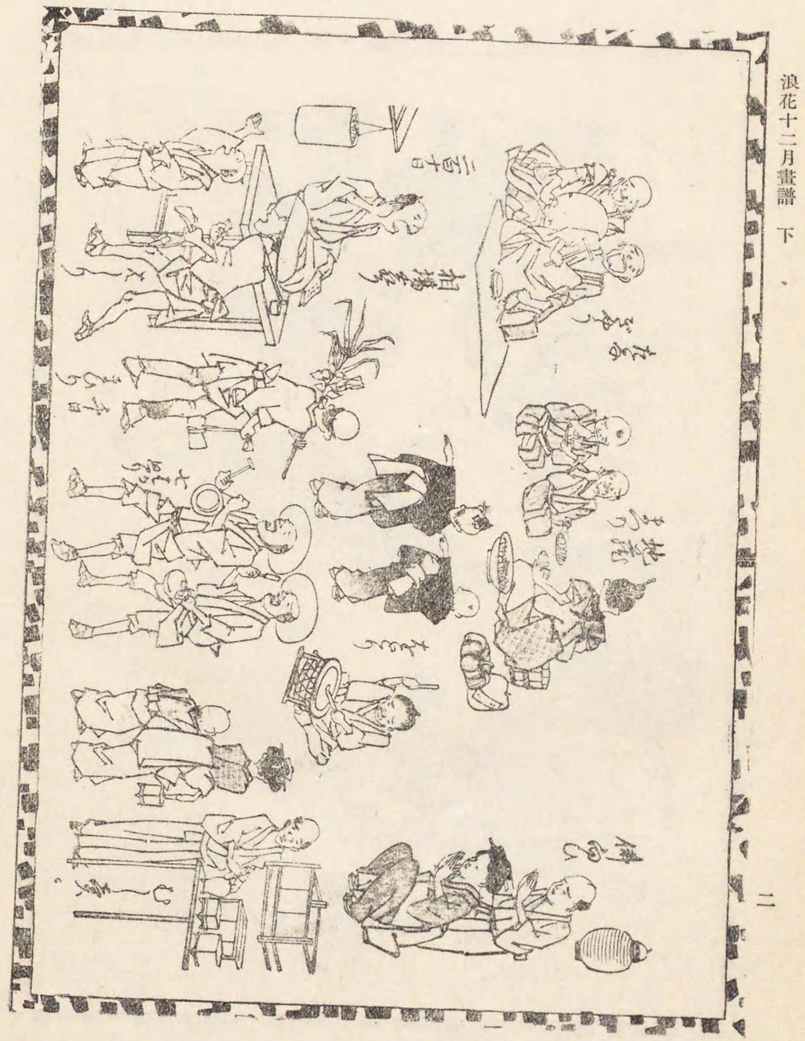
びわやう湯

暑氣はらひ枇杷葉湯ハ京都烏丸六角下る所を本家とすゆへにからす丸といふ○**七月**

七夕

の說さま〳〵なりといへども神代のむかし天の棚機姫命天照大神の和妙の御衣を織しむと記せるを續齋階記に七月七日織女牽牛にいたるとあるを混同して七夕をタナバタとよみてかくのごとし今夜二星を祭ること天平勝寶七年ニ始るといふ紀の貫之の哥に　まことかと見れども見へぬ七夕ハそらになき名の立るなるべし又或人の狂哥に　たなばたは河内にもあり天の川とゝうしひくかゝハはたをる此說にてよく辨ふべし

浪花十二月畫譜　下



聖靈迎　今夜世俗の人亡靈の來る夜とて火をたきて門外に出て迎ふるとあり唐土にも中元の朝父祖亡靈を子孫たる人禮服を着て門外に出て空をのぞみて禮拜し尊靈を導き入て祭るとまたこれを送り出る孝子の誠をつくすに似たれどもたわふれに近しといふ唐土にも例あるぞとぞ

棚經　七月十五日盂蘭盆會をなし目蓮尊者が母のがき道に陷たるゆへに此功德をもふけて諸〳〵のがきをまて食することを得せしむるといふ世說たとへ佛意の說に違ふといふとも先祖父母の天堂にいたり安養淨土に生ずることを望まずして餓鬼になりてこれを祭るハ思ハざるの甚しきなり當日賴み寺の住僧魂棚參り家々にゆきて回向するハ實ハ佛檀を改めるを趣意とすと云

地藏祭　佛道にてハ地藏尊と敬ひ神道にてハ道祖神祭るといふ秋ハ萬物の納る所にて七月ハ其初なりゆへにこれを祭り小兒を集るハ無心にして餘年なき地藏尊の愛し給ふかゆへといふ

盆踊　秋ハ志ゆく殺ニて一切萬物を殺し納るのはじめなれバ其陰氣にまけさせまじきか爲に陽氣をたもたしめんがために踊さするといふ

七墓廻り　大坂四方にある處の七ヶ所の茶毘所へまふで無緣法界のために御題目をとなへ亡者の靈を弔ふことそれ〳〵組あり多人數申合せさき〳〵にて勤行回向殊勝なる事にて功德莫大なるへし

千日參　七月十日諸寺院へ參るを千日の功德に當るといふを以て千日參りといふ多くハ京て淸水寺其外大坂ハ天王寺へ參るを主とする殘暑の堪がたく殊更盆前せわしき中を參るを以て功德千日に當るといふ

攝待　大坂辻々濱々日覆やねを調へ湯茶をわかして往來に施すをせつたいといふ其功德大なりといふ佛說因果經にくわし

施餓鬼　目蓮尊者が母の地ごくにおちる因緣をもつて亡者

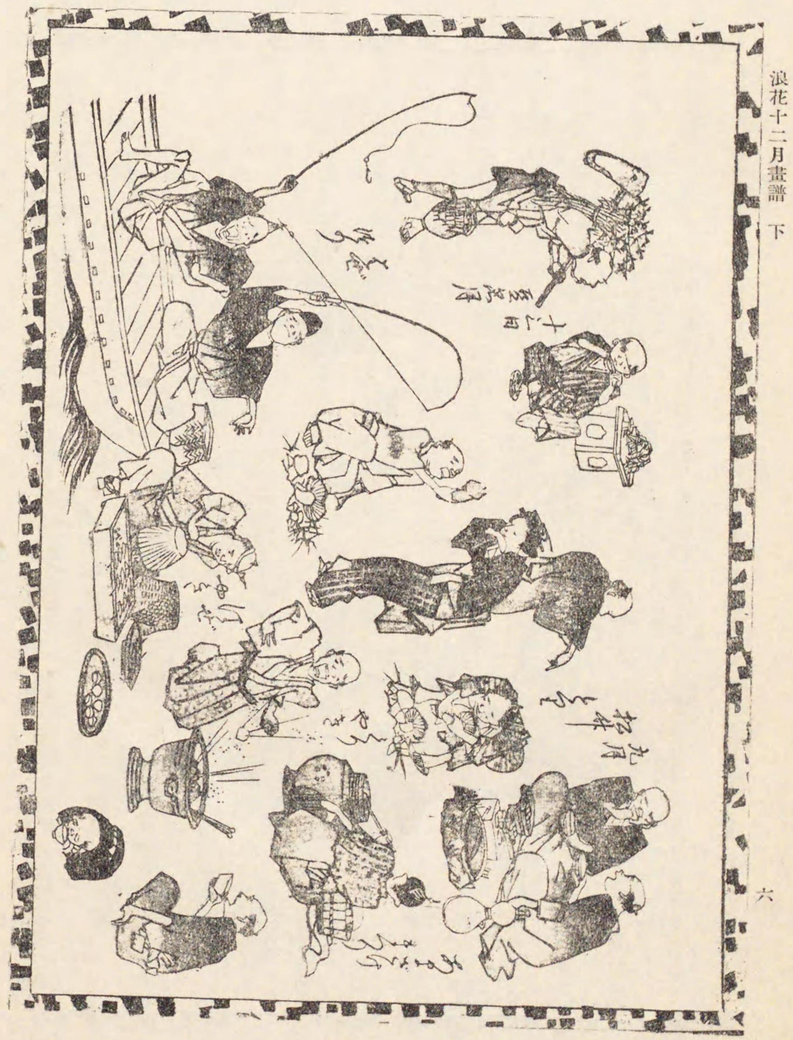
靈魂のために餓鬼に水食をほどこせば其功德をもつて心ざす處の尊靈の天堂往生のたすけ益ともなるといふをもつて衆僧を供養し餓鬼にほどこすを以て本意として功德大なりとせがきの式宗旨によつて少しヅヽたがひ有長文ゆへこゝに畧す

相撲　すまふハ神代のむかしより始る禁庭にハ垂仁天皇の御時にすまふの節會行わるゝといへども其作法定まらず神龜年中奈良の都のとき近江國志賀の清林といふものを召れ御行司定りすまふの式くわしく成此時出雲の國野見の宿禰大和の國の當麻の蹶速兩人を朝庭に召れすもふなす是日本すもふの中興といふ人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜三年諸國一統滿作しすまふ專ら興行す國中に高札を立て力士を召れ左右に大關關脇小結を定めらるゝくわしきハ相撲大全にあり天竺中華すもふの始めの圖見へたり

李穀　于蘭盆會聖靈の箸に遣ふ處一名麻木といふ李穀を取たる穀ゆへにいふ箸に遣ふ所の由來分明ならず

田の實　**節句**　**八月**朔日を田の實の節句といふて祝ふハ建長の比よりといふ當年の新米できたるを農家たがひに音信して祝ふ事なり四季物語に小松帝いまだ平人にてましませし比より初めて御位に卽せ給ひ祭らせ給ハゝいろ〳〵の果を其年の早稻穗にそへ奉り五種の餅なとをとゝのへ奉らる初穗を祝ひ今日田の實といふ又大君の御治世爾來當日を正月元朝のごとく祝賀し給ふなり八朔の節會といふ武家にハ大切の祝儀日也因ニ云備前岡山において六月朔日當年の新穀を國主へ奉る是氷室の代りと聞く吉例のよし

月見　今夜月淸朗にして仲秋月を翫ふ事大かた李唐の代より盛にして詩哥文人おの〳〵其詠多雅會を催し俗人ともに月を賞し酒に遊ぶ事和漢をなじ春のや名月や樽かたむけぬ家もなしまた



十五夜の月を望月といふハ日と月とはるかに相望む義なり又望ハ滿なりと注してみつるの儀なり今夜かならず芋を賞味するハ都鄙一統にして江戸にてハ唐の芋をきぬかづきといふ江戸の人別して月を祀る事ていねいなり江戸大坂にてハ月見だんごを製し食すれども京都にてハせざるなり月の宴といふ題にて　まぬけ庵秋もはや半をけふハ杉樽のかたふく月のをしき呑あひ

放生會　石清水をよび離宮八まん宮など其ほか諸所にて放生會とて鳥魚を多くはなち助けし見給ふ應神天皇の御祥忌なるがゆへ御勅使御參向伶人舞樂を奏するなり　村中ハ戸障子までもとりはつし八わた近所も放生會とて　まぬけ庵

ひかん茶の子　ひがんのことハ二月の處に辨たり河東記に新に作れるやきもちを食　牀　の上に於て諸客に與へて點心せしむといふ輟耕錄に云朝飯まへおよび飯後午のまへ午後晡前の小食をもつて點心とす舜水田點心といふハ日本にていふ茶の子なると勢陽雜記ニ云伊勢の呑海院ハ絶景の地にて駿河の富士山も見ゆる此所にて一休和尚發句に　海を呑む茶のうか□きの富士の餅此茶の子といふハ今いふ茶菓子のるいなるべし前書にいふ處ハ田家にていふ問炊小書飯のるいなるべし

○九月

松たけ狩　京都にてハ稲荷山を上品とし東西北所々山より多く出る大坂にてハ甲山中山寺の邊にて茸がりをもよふすなりそれ松蕈ハ氣味あまく平に毒なし酒濁りてくさりたるを治るといふ

醴　九月の祭式を俗に甘酒祭といふこれを以て來客を饗すゆへに爾いふ神代の酒にして一夜酒といふ甘酒ハ氣を下し腸胃を利す多く飲バ蟲を生し泄瀉をなす小兒によろしからすと本艸綱目にいふ

栗　九月の節句ハ菊の花を以て祝義とし長壽を賀す菊酒を飲み不老長生を得るといふ栗

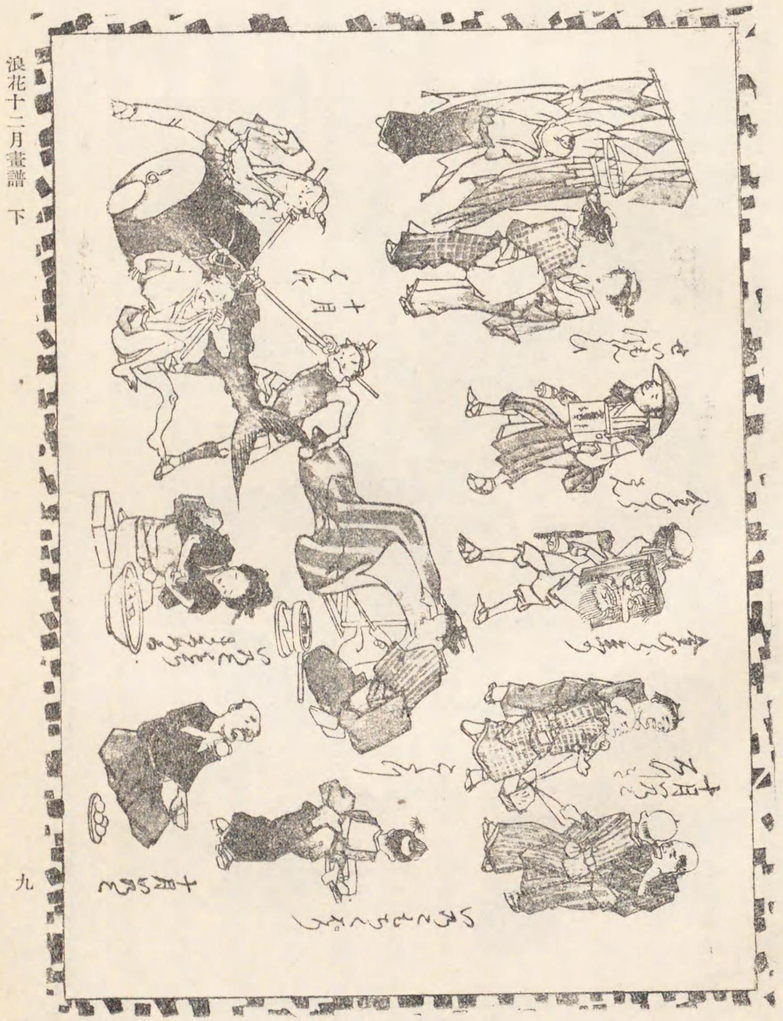
を以て嘉食とし家々に神に備へ佛に供し家内打よりこれを祝し食ふ本艸綱目に栗氣味ちほはゆく温にて毒なし氣をまし腸胃を厚くし腎をおぎなひ生にて食へバ腰脚の遂ざるを治す筋ほねを切くだき腫病瘀血を治す生をかみてぬるに効あり火に埋みて食へバ汗をさり生にて食へバ氣をはつし煮蒸炒熟して食へバ氣をふさぐ小兒多く食へバ消化がたく蟲を生ず心得べし

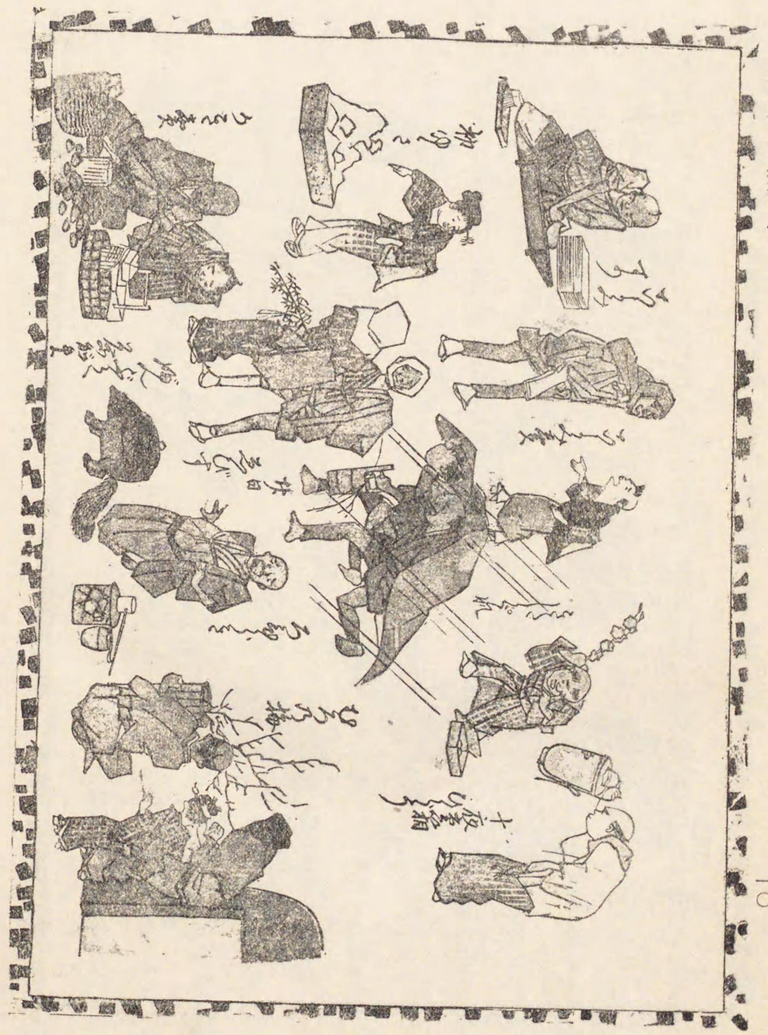
鮒釣　八九月の比大坂の人木津川口安治川なとに出て鮒を釣ことを樂しみとす此魚平にして毒なし中をおぎなひ氣をまし胃をひらき食を消すといふ

豆名月　菅丞相太宰府にて九月十三夜の月を見給ふの詩あり其比よりある事にや法性寺入道相國の九月十三夜の詩を無題集にのせられたり源氏物語にゆふぎりの大將小野より歸り給ふとき九月十三夜の月のいとはなやかにさし出ぬるを賞し給ひしことあり今夕豆を祝し食ふ事時來り熟したるを以て賞翫す本艸綱目に氣味あまし温にて毒なし中をゆるくし氣を下し大腸を利し水脹腫毒を消ず生ハ温炒てハ熱微し毒あり多く食へハ氣をふさぎ痰を生ずといふ

暦賣　御免を蒙り大經師内匠例年九月上旬來年の暦をすり出しこれを天下にひろく賣ひろむ○十月

亥の子餅　十月ハ極陰にして亥の月なり來十一月ハ一陽來復して子の月なり陰盡て陽發するを壽きて亥の子といふて一陽來復し迎ふといふ意にて餅を搗て祝ふ別して兒女子ある家ハ女成人の後よき子をもふけるやうにとてこれを舂なり餅ハ陽物にて腸胃をあたゝめ腎精をたもつといふ緣語を以て　天子御みづから祝して亥の子の餅を舂せ給ふといふ世事談に堀津國八木むら門太夫といふ土人數代毎年亥子の餅を貢とす清浮の火を以て製し餅に赤小豆を加へて舂く箱に入て五角に栗五ッ





を貼す初亥の日百箱を門太夫より獻ず中亥日ハ大丸村の里中より獻ず末の亥日ハ切畑むらより獻ず亥兩日の年ハ切畑むらを除く山科の土人來り京師へ運び亥の刻禁裏へ納める其筥を分ち給ひ江府へ下る此例凡千年餘におよぶといふ

火燵開　當月亥の日に火燵をひらくハ陰盡て陽發するの理になぞらへて火燵をひらくを吉例となす

誓文祓　京都京極通四條の角誓文ばらひの社とて天照太神素盞雄尊御兄弟たがひと玉と劍とを取かへて眞心を明し合され誓ひ給ふ時素尊ハ三女を生まし太神ハ五男を產給ふ此五男三女の神靈を崇めて誓文の社といふ因て天下の商家年中商ひのために演る處の僞虛言を償ふといふ意を以て十月廿日常に代呂物賣買取引する得意はじめ親族をまねき酒飯を以て饗しにおよぶを俗に蛭子講といふ是福の神商ひ神といふ由緣を以て夷大黑尊を祀るといへども實ハ五男三女の神靈を祀るを本意とす因に云備前國兒島郡郡むらといふに快よしの神社といふあり祭神を問ふに天照皇太神素盞雄尊御兄弟玉と劍とを取かへ五男三女の心化し給ふとき兩神あなうれし快よやと歡び給ふ所の心靈を祭りて神體と崇め奉るといふ

金毘羅參　十月十日ハ金毘羅宮勸請の日なれなればとて一年中の大法會といふて讃州象頭山にをいて例祭を行ひ諸國よりはる〳〵參向する事人のよくしる所也祭る處金毘羅宮崇德帝神靈といふ　卽不動明王の姿をあらわし給ふも此帝崩御八月廿六日金毘羅大權現とあらハれ給ふを十月十日といふいづれか是なるやわきまへず

十夜　白河女院宮中にて始めて勤行なさしめ給ふ其後後花園院永享二年伊勢守平貞經父子此法會を中興あり又其後明應四年武州品川驛願行寺開山觀譽祐乘上人勅に應じて京師に來り十夜の法會

を淨土宗にて執行する事ゆるされ鎌倉光明寺に歸り始めて行ふ是淨土宗諸寺院にて十夜修行の始めなり

こも僧

梵論僧ハ普化禪師の宗派にて十六派にわかる關東に普濟寺普提寺一月寺上がた廿四ヶ國總本山を京都大佛の南なる明暗寺といふ　大君より十八ヶ條の御定目御書を下さる其畧文ニ曰夫普化宗門梵論僧ハ表に僧行を修するといへども内心に武門の正法を失ハず勇士の隱れ家守護不入の宗門天下の諸士に准せらるゝといふ　楠正成敵陣へ忍び入陣取又ハ敵方の英氣を探りふらんとして普化僧に姿をやつされしと今の普化宗旅僧のすがた　楠正成の其ときの姿なりといふ實否をふらず○十一月

ふいご祭

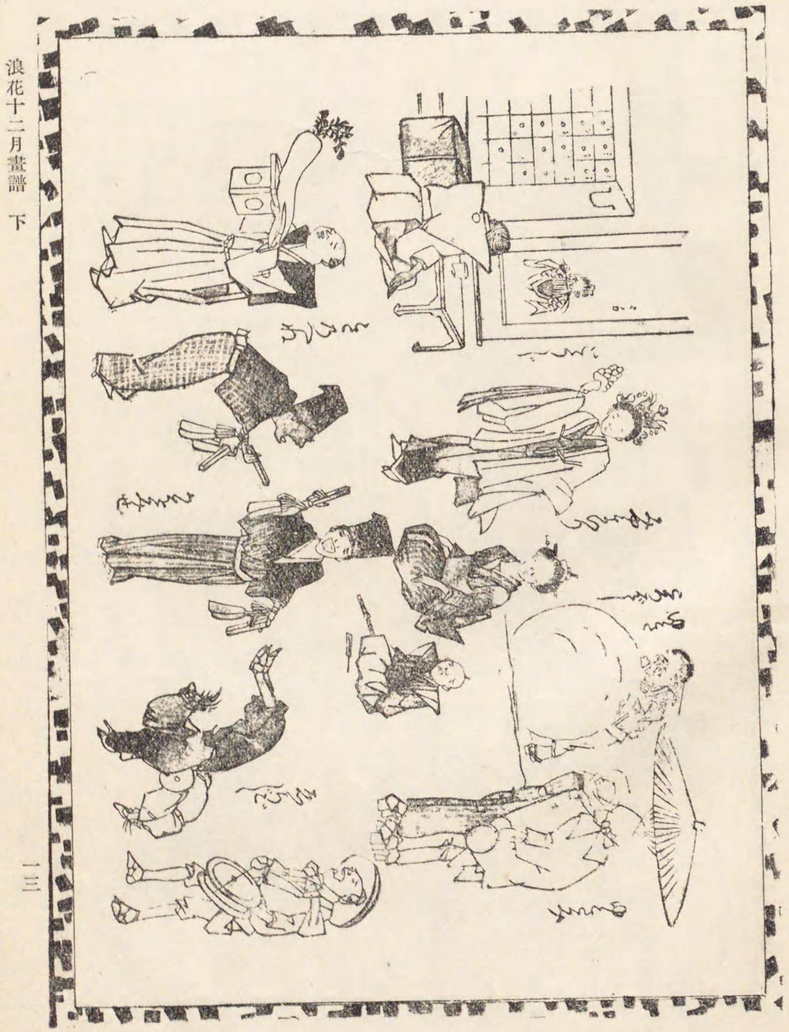
當月一陽來復月にて天神地祇の靈をむかへ奉るとて社々におゐて其社の緣日に火を焚て神靈をむかへ奉るを火燒といふ就中八日をふいご祭とてふいこ職の者これを行ふに稻荷大明神の火燒とするハ大に非なり神代の昔天の目一ツの命劍を造り初め給ふ時ふいごを調へつかひ初めらるゝゆへに此神をふいごの祖神と崇め攝州東成郡生玉北向八まん宮社地に社あり又播磨國多珂郡間子むらに社あり然るを俗說むかし三條小鍛冶宗近名刀を鍛ひし時信じ奉る處の稻荷大明神の童子とあらハれ出て槌を打て助力し給ひしといふ因緣を以てふいこ祭りを稻荷大明神の火たきといふハ大なる誤りなり稻荷大明神ハ五穀の守護神にして鍛冶職に因なしよく辨ふべし

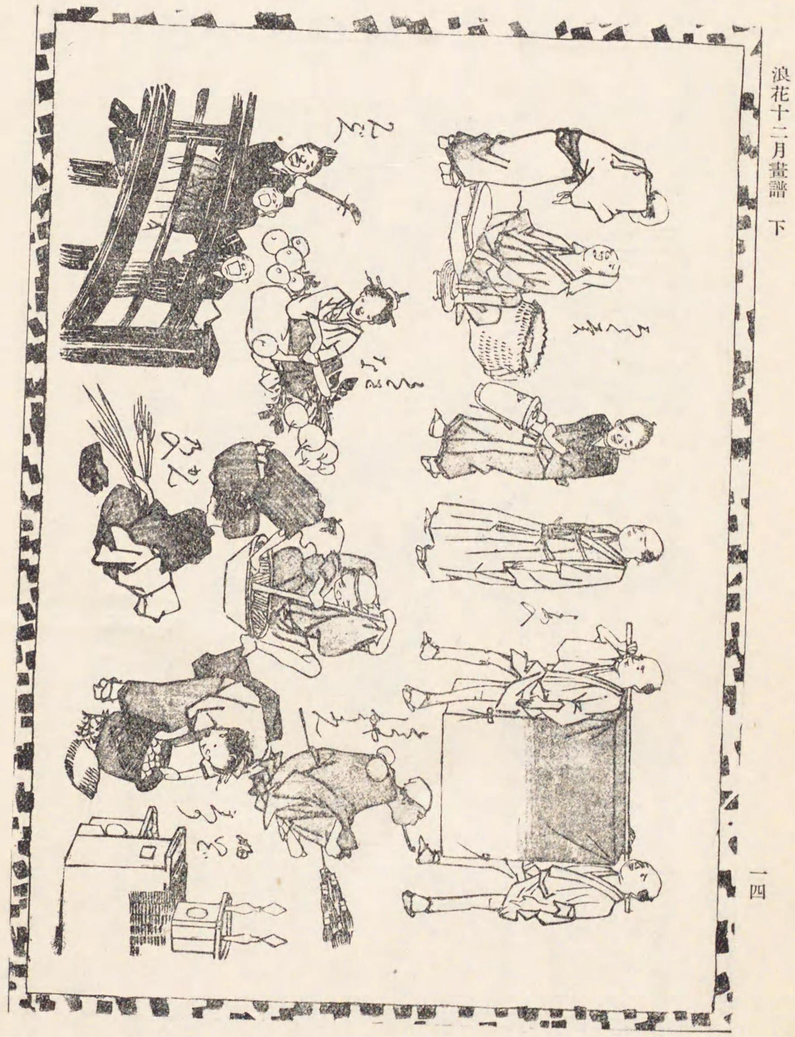
冬至

十一月の中冬至ハ冬に至り陰のきハまりにして一陽來復するの日なり周の世にハ當日を以て正月元日とす子の日を正月とするがゆへなり因て俗に此日を唐土の元日といふ本朝ハ寅の日を以て正月となすゆへに儒者醫師の家にハ當日雜煮を調へて祝儀する也

甲の子

子の月甲子の日陽氣根ざ





し始るを以て祝ひ大黒天ハ鼠を以て神奴とし給ふといふ所謂を以て此日大黒天神道にてハ大己貴命を祀るなり

子ハ正北に建して一陽根さし始まるなり一陽きたりかへるといふを以て北といふ

宮參　一陽來復とて芽出たき吉瑞なりとて聟取嫁入元服角入など小兒の髪置初袴の着はじめ女子ハかづき初をの〳〵吉日をゑらみ生土神へ御禮に參り其歸るさ一家親るい又ハ知己の家に披露につれゆくをいふ

顔見世　天正年中京都四條河原において出雲のおくにといふ女名古や山三郎といふ足利の浪人と心を合神樂舞を變じて俳優をなすこれを歌舞妓狂言といふ公にハ物まね盡し狂言といふ忠孝貞烈善惡邪正古の行ひのありさまをそれ〳〵に物のまねびをして見せる狂言ゆへかくのごとし十一月ハ一陽來復の吉例を以て初舞臺とし來年中是等の俳優者ども打あつまりて狂言興行いたし候間御見物に御入來下されよと素貞にて見物人へ目見へをするを俗に顔見せ座附といふハひいき〳〵の連中より良見世目見へを祝んがため手を打て祝ふを手打れん中といふ是も元祿享保の比より追々はじまり當時ハ絶てなし

雪　それ水の形を變換するハゆきを以て尤もふしぎなりとす海陸の氣上騰して雲をなす雲冷際にいたれば其温を失ひ雨となる氣中に在をもつて一々みな圓なり初め圓ハ至微至細在をもつて併合し終にハ重體點滴の質をいたす冬の時氣昇りてをなしく雲をなし冷にあふて卽ちまた圓點をなす寒の厚薄によつて雪さま〳〵と形を變たりすでにもつて雪ハ六花とて六の花の形をなす雪萬木萬艸を養ひ豐年の貢といふ事よく人のさる所也○十二月

寒の入　世俗寒の入に葱揚とうふ餅をみそ汁に煮て喰へバ中寒のうれへなしといふ事近來のことなりこれに

よつてあつき餅を家〳〵ニ祝し食ふも寒をふせぐのためなるべし

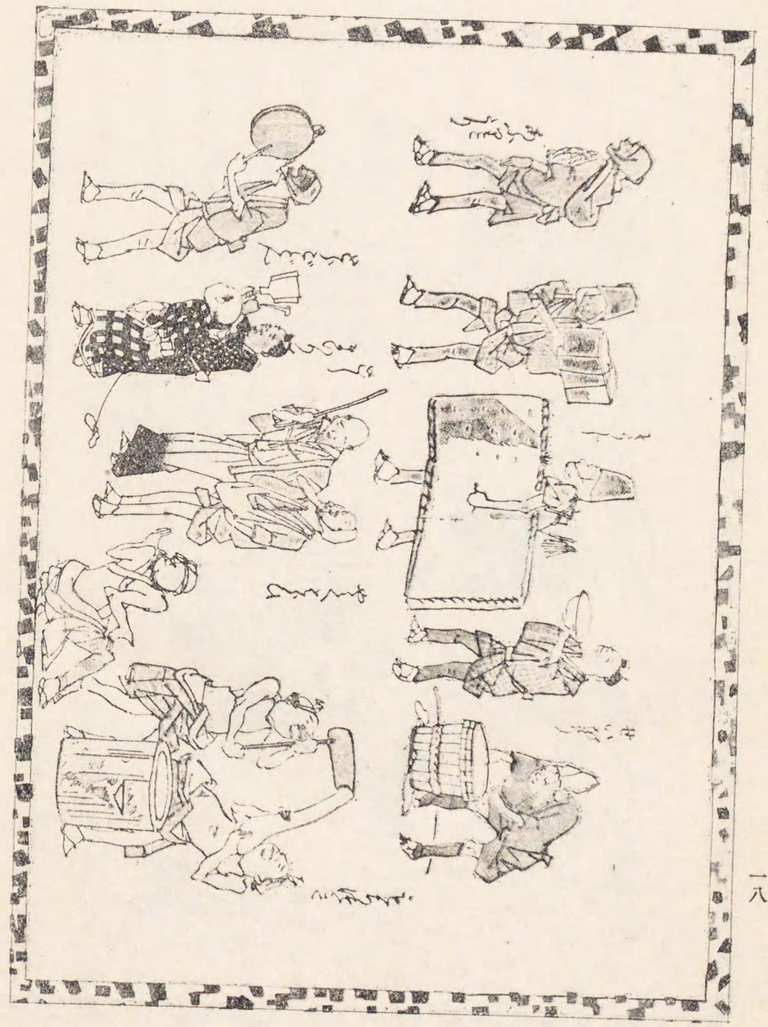
茶筌うり　延喜のむかし天下疫病のために人民多く死るとき勅を蒙り空也上人東山祇園の森において茶を立て呑しめ救ひ給ハゞ因縁を以て今世正月元三大福の茶を喫すること天下の吉例とするからぎをん二軒茶や藤やといふに其時の釜を所持して御遊見の砌改めさせ給ふ古器ありこれによつて毎冬十二月十三日より空也堂の僧日々京中において茶筌をうる大卅日の夜ハ祇園の社前に居てこれをうる價十二銅に閏月ニあれバ十三錢を以てこれをあきなふ

豆打　節分の夜柊のゑだに鰯のあたまをさすは芽出度ひいらぎ鰯ハいはふの縁語なり白大豆ハ陽物なりこれを炒て鬼ハ外へと福ハ内へと祝し打事天下貴賤とも一統かくのごとく年數大豆を祝ひ食するを吉例とす陰鬼をのぞき陽神をまねくの古事にて古の儺の古例なり厄はらひ宮參りも同意にて來年中の厄災を除かんがために土産神惠方の神社へ參り厄はらひのおにとをとりながら祝詞をのぶるを吉例とす

厄はらひ　節分の夜已れが年の數大豆と鳥目とをつゝみて乞丐人にあたへ何かといろ〳〵祝詞いわゝむるを厄はらひといふこれ各來る年の厄難災禍をはらふの呪なるべしこれがために其年の吉方の神社へ參るを年まいりし惠方參りともいふ又これが年數の分市町所々の辻地藏尊へ參るを厄除といふ又家々にて年弱きもの小兒など打參りいろ〳〵鳴物打オゴロモチハ内ニカマンエコトノ、御見舞ジヤ子どものゝしりはやすを吉例とす其奇特なきにあらずといふ

すゝはらひ　家毎に十二月中旬より屋中の煤塵を拂ふ事和漢おなじと見ゆ閏書に臘月廿四日毎家塵をはらふとあれバ中華もあること、見ゆ

餅搗　十七八日比より家



々餻を舂く寒の中に搗をよしとするもし寒早くハ寒の水を以て製するをよしとすれば其心得あるべしをの〳〵餻を舂ことを時とし祝儀とする事人の知る所のことし

せいほ　當月親るいにおくりものして歳暮を賀す又忘れる處の鰥寡孤獨貧窮困苦の人にも我力の分にふたがふて金錢衣服それ〳〵の品物をめぐみ又われに恩ある人師と敬ふ人醫師などへも分に應じて厚く物をおくるべし是人情にしてかならず家のため我爲なれバ吝嗇なるべからず況んや家業の得意賣先へハ勿論報恩のためになれバ熟覽をむすふべし

時に嘉永二酉仲秋需に應じ畫面にふたがふてこれを釋解におよぶ畫外あまたなれどこれを畧す

狂言堂　春のや織月述

金生堂藏版

『風俗篇』編成に當りて

南木芳太郎

移り變り行く浪華の文獻、鄉土愛の發露として、いつとなく興味を以て年來蒐集し來つた藏書の中から風俗に關したものを、あれこれと撰擇した。それは今次上梓される浪速叢書の風俗篇に收錄すべき必要からであつた。幾分の藏書を有する關係から推されて相談役となり、不肖を省みず趣味と鄉土の爲め、繁劇な商業事務の中を割いて一臂をお貸しする事にした。考へれば淺學寡聞、この擔任は瘦馬に重荷である。であるが叢書刊行の目的は創作にあらず古書複製であり、その原本所藏の有無に因つて價値の定まるのである。自已の所藏する處のもの敢て誇りとするに足らずと雖、この種の傳本が近來乏しき折柄、幸に死藏に終らず活用せられて、世上幾多の人々の裨益とならむ事は宿年の希望である。かういつた意味から臆面もなくお引受をした。處で風俗といつても內容を廣義に解釋すれば中々汎くして厄介である。がその中から成べく大阪町家の特有なる風俗が現はれてゐるものを撰み出したいと考へた。然し纒つた適切なものが割合に少ない。初めは大阪の洒落本を多く蒐めて見たら面白いと思つた。洒落本ぐらゐ鄉土色の出た輕くて適切なものは他に求めてもなからう。方言がよく表はれ、當時の衣類調度や習慣が如實に書かれてあるからと思つたが、之れでは洒落本集になつて仕舞ひ、何んだか一人よかり

の通になつて仕舞ふ怖れがある。そこで一般向のする興味本位のものを目安として、よく大阪情趣の畫かれたものをと考へ、いろ〳〵取捨した結果、今次の出版目次を編成したのである。處で花街に關係したものが多くなつたのは、當時の大阪風俗を物語る世相の半面として止むを得ないと思ふのである。然し以上の書目では決して浪華風俗を代表する分量とはいへない。聊か物足りない譯であるが、幸に第二、第三期と續々叢書の刊行が現實せられた曉には今よりは一層珍らしく面白くして必須なものをきつと收錄し得やうかと思はれる。寡聞の罪を乞ひどうか浪華風俗の文獻に對し御氣附があれば御示教を竢ち足らぬ處を補ひ得たいと希望するのである。

昭和二年三月

校訂を了りて

此の『風俗篇』の初校が廻つてから、滿壹ヶ月の日子を重ねぬうちに、校了の二字を書き得たことは、近頃の一快事でした。

『粹』といひ、『いき』といひ、『通』といふ。それらの分子を、少しでも自分が持ち合せてゐたら、この篇に收めた十一種の書目に對する解題が、もつと〳〵、粹に、いきに、通に、書けたでせうに。生憎のこと。さぞ言ひ足らぬことばかりと、それが心掛りです。

とはいへ、校訂は、自分として及ぶかぎりの注意をいたしました。せめては解題の拙さを償ひたいとの心持ちから。

昭和二年三月

校訂者識

昭和二年四月五日印刷
昭和二年四月十日發行

浪速叢書

第十四

（非賣品）

編纂校訂者　大阪市西成區松原通二丁目四三　船越政一郎

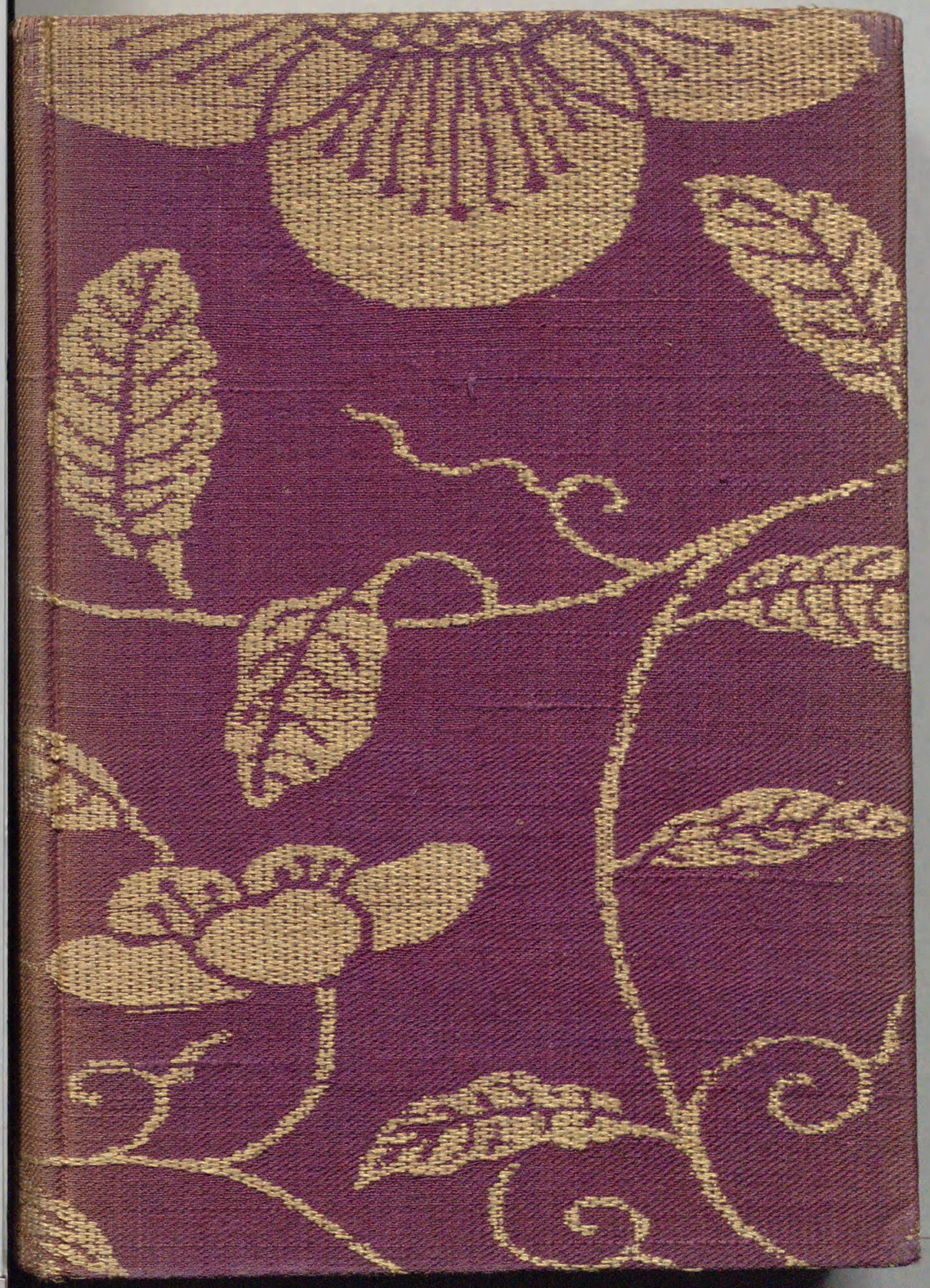
發行者　大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内　浪速叢書刊行會代表理事　江崎政忠

印刷者　大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五　長谷川泰三

印刷所　大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五　桃谷印刷株式會社　電話南三〇六一番　三七二二番

發行所　大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内　浪速叢書刊行會　電話土佐堀六六二二番　振替口座大阪七七三六三番

不許複製

浪速叢書（全拾六卷）所收目錄

第一　攝陽奇觀
第二　攝陽奇觀
第三　攝陽奇觀
第四　攝陽奇觀
第五　攝陽奇觀
第六　攝陽奇觀
第七　攝津名所圖會大成
第八　攝津名所圖會大成
第九　大阪商業史資料
第十　大阪訪碑錄
第十一　大阪訪碑錄
第十二　地誌
第十三　地誌
第十四　風俗
第十五　演藝
第十六　索引